

中国語教育の比較文化論

——香港とシンガポールを例として——

合 田 美 穂

1. はじめに

近年、日本では、「飲茶（Yamcha, ヤムチャ）」、「叉焼（Chasiu, チャーシュー）」、「火鍋（Fokuo, ホーコー）」といった中華料理のメニューの単語がよく知られている。また、それらの馴染みの単語のほか、若者の間では、芸能人が使用したことから「有問題（Moumantai, モウマンタイ）」という中国語を使うことも流行しているという。しかし、それらの馴染み深い中国語の単語は、中国の標準語である北京語ではなく、一方言の広東語であるということを知っている人はどれだけいるだろうか。これらの言葉を北京語に言い換えると、「飲茶（Yincha, インチャ）」、「叉焼（Chashao, チャーシャオ）」、「火鍋（Huoguo, フォグオ）」、「没问题（Meiwen, メイウエンティー）」となる。こういった単語だけを比較してみるだけでも、中国語の標準語と方言は、似て非なるものであるといえるのである。

中国には非常に多くの方言が存在している。例えば、広東省の主な方言だけを調べてみても、十種類以上の方言が存在する。いわゆる広東語といわれている言葉は、広州や香港周辺の地域で話されている方言なのだが、その他の主な広東省の方言には、台山方言、潮州方言、客家方言や南海方言などがあり、これらの方言同士が通じ合うことはない。それぞれの地方の人々は、他の方言グループの人とコミュニケーションをとる際に、標準語である北京語を媒介語として使用しているのである。しかし、香港人の場合、北京語ができる人はさほど多くない。実際に、香港人が、墓参りをしたり親戚を訪ねるために、中国広東省の農村に行った際に、現地の方言がわからず、コミュニケーションをとることに困ったという話をよく耳にする。また、筆者が現在、教鞭を執っている香港中文大学でも、一部の中国大陸からの学生が、広東語ができないために、中国語ではなく英語で、香港人学生とコミュニケーションをとっている姿を目にすることがある。

日本各地の方言は、アクセントや単語に違いはあるものの、異なる方言同士の場合でも、コミュニケーションをとることができる。たとえ関西弁しか話せなかったとしても、日本全国を旅行しても問題はない。中国では、日本に比べて、方言同士でコミュニケーションをとることは非常に難しいといえる。広東語しか話せない人の場合、広東省以外の地域への個人旅行はもちろん無理であろうし、広東省の中で活動することさえも不便を感じるのである。そういうことから、まず、「日本人なら必ず日本語を話せるが、中国人は中国の標準語である北京語を話せるとは限らない」という事実を認識する必要がある。香港人や、中国の僻地の農民や、少数民族の多くがそうである。香港人にとっては、北京語は母語ではないというだけではなく、外国語のようなものだと言えるのだ。

本論文は、香港とシンガポールにおける中国語教育の特色と、その文化的意義について比較したものである。この両地域を比較対照として選択した理由は、両地域はともに中国系の人々がマジョリティを占める地域であり、近年、中国語の標準語教育に力を入れているということである。また、筆者は両地域に居住経験があり（香港は現住地、シンガポールは7年の滞在経験がある）、参与観察等を通して両地域を比較しやすい環境にあることも両地を選択した理由である。

2. 東南アジアの歴史と中国語

北京語話者と広東語話者では、コミュニケーションをとることが難しいということを上述したが、これは会話の場合にのみいえることである。筆談となるとまた話は変わり、コミュニケーションが可能になる。なぜなら、北京語と広東語の決定的な相異は発音であり、語彙や文法などに多少の違いはあっても、読み書きには、同様の中国語（漢文）を使っているからである。つまり、中国各地では異なる方言が存在していても、基本的には同様の中国語がベースになっているのである。そういう点から、本章では、東アジアの歴史

における中国語という背景について論じたい。

一部の歴史学者の間では、歴史的に中国、日本、韓国、ベトナムや琉球などは「漢字文化圏」として形容されている。以前の東アジアでは、漢文は、各国の外交、商業や学術での共通言語であった。漢文の地位は、現代社会における英語のようなもので、漢文を知っていることは、その人のステイタスを象徴することにもなり、各国の大臣や学者はみな漢語に精通していた。日本の場合、「漢字文化圏」の周辺に位置しており、「中華帝国」とは朝貢関係を築いていなかったために、漢文に対する要求は、さほど厳しいものではなく、中国文化の取り入れ方にも自主性を持っていた。よって、江戸時代の日本人が書いた漢文は、最も特別で、中国語とはかけ離れており、半分中国語、半分日本語の「候文」はもちろんのこと、わざわざ漢文で書こうとした文章でさえも、中国人が見ると奇妙な印象を受けるようである。思想と文化史の角度から見た場合、各国の漢文のレベルと態度の差異は、各国の政治や文化観、そして、中国との政治、経済及び文化関係を反映しているといえるのである。

歴史的に、中国ではもちろんのこと、日本やアジアでも、中国語は極めて重要な言語であった。中国では、これまで、「武」よりも「文」を重んじる伝統を持っていたため、文章を書くことが上手く、古典をよく知っている者が、身を立て名をあげていた。良い仕事を手に入れたければ、中央政府の言語に通じる必要があった。実際に、「中国語」という言葉は、非常に曖昧な言葉であるといえる。歴史上、中国では、本当意味での標準語というものは出現していなかった。首都がどこにあるかによって、首都一帯で使用されている方言が、長い時間を経て自然と統治階級の言語となり、半公用語のような地位を築いていったのである。しかし、従来、中国各地では、それぞれの地方の方言が使用されており、中央政府は、それら各地の方言をコントロールすることはなかった。というよりも、コントロールすることができなかった。秦の始皇帝でさえも、文字を統一することはできたが、標準語を定めることはできなかったのである。

元、明、清の三王朝は、首都を北京に築いたため、北京語が数百年の間、半公用語としての地位を保持していた。当時、中国で役人になるためには、必ず北京一帯の方言、特に、皇族や役人が話す公用語（官話）に精通していなければならなかった。もし、いくら才能があっても、北京語ができなければ、中央政府で仕事をすることはできなかったのである。1つのエピソード

であるが、孫文は、若いころ、清朝の権力者である李鴻章を、突然訪ねたことがあった。孫文は広東省中山県の出身で、流暢な広東語を話し、洋書を読む彼にとって、英語が第2言語であった。しかし、当時、中国ではまだ、北京語は標準語として地位を確立していなかったので、孫文はあまり北京語が話せなかった。李鴻章は、突然やってきた無名の、それも北京語があまり話せない若者を見下して、積極的に孫文との会話をしようとしなかった。もし、孫文が北京語に通じていたなら、李鴻章に見込まれて、抜擢されたかもしれない。そうならば、中国の歴史もまた異なるものになっていたかもしれない。

北京語は、中華民国と中華人民共和国成立後、標準語としての地位を固いものとした。ある民間の歴史書によると、民国初期に、北京語と広東語の間で、どちらを「国語」とするかの政治的な大論争が起こり、革命の元老の多くが広東人だったことから、広東語を推す人が多かったものの、最後には少数差で、北京語が多数決で選択されたという。これが事実であろうとなかろうと、戦前の地方方言の勢力の大きさは、疑いなく大きなものであったといえることができる。中華人民共和国成立以降は、北京語は正式に「普通話（標準語）」とされ、中国の公用語及び教育言語となった。しかし、中国共産党の元老たちは誰1人として、北京語らしい中国語を話すことはできなかった。毛沢東は湖南訛りの普通話を話し、鄧小平は四川訛りの普通話を話していた。そして、江沢民をはじめとする第3代の指導者になってはじめて、訛りのない普通話を話すことができるようになった。中華人民共和国成立以降、50年あまりの普通話教育によって、現在、中国の青少年世代は、みな普通話が話せるようになっている。

3. 中国語と香港人

例えば、毛沢東と鄧小平の普通話が、標準ではないというなら、香港人が話す普通話は論外であるといえよう。中国の北方の人々は「天不怕、地不怕、就怕広東人講官話（天も鬼も怖くない、怖いのは広東人の話す普通話だ）」と、広東人の話す標準語を例えている。広東人の中でも、香港人の普通話が最も下手だと言われている。香港中文大学普通話教育研究及發展中心主任の何偉傑によると、香港人が普通語を学ぶ際に、最も障壁になるのが母音及びアクセントであるという。例えば、「木柴（muchai, 薪）」を「木材（mu-

cai, 木材)」と言い違えたり、「幸福 (xìng fú, 幸福)」を「辛苦 (xīng kǔ, 辛苦)」と、「法院 (fǎ yuàn, 法院)」を「花園 (huā yuán, 花園)」と読み間違えたりすることである。また、広東語の「人客 (Hāt yān, 客)」は、普通話では「客人 (kè rén)」であるが、広東語の「人客」をそのまま普通話の発音で(「人客 (rén kè)」として)使用したりしているのである¹⁾。その他にも、普通話の「下雨来了 (Xià yǔ lái le, 雨が降ってきた)」は、香港人が発音すると「鯊魚来了 (Shā yú lái le, サメがやってきた)」と聞こえ、「我等你 (Wǒ děng nǐ, あなたを待っています)」は「我頂你 (Wǒ dǐng nǐ, あなたをやっつけます)」と聞こえ、「飛機 (fēi jī, 飛行機)」は「肥鷄 (fēi jī, 脂ののった鶏)」と聞こえるようになり、それらは笑い話とされている。中国返還前は、香港人の民族アイデンティティは曖昧であり、中国人としての意識より、香港人としての意識の方が強かった。多くの香港人には、中国大陸から逃れてきた過去があり、中華人民共和国を認めていなかった。「大香港主義」と、この反共産意識によって、それまで香港人は普通話を学ぶことに積極的ではなかったのである。イギリス植民地時代には、学校では普通話教育は行われていなかったため、普通話を勉強するのなら、自腹を切るしかなかった。当時の香港では、英語を学ぶ人が多く、英語に精通していれば、政府機関や大企業に就職することができ、さらには欧米の教育機関に進学することができた。その一方で、普通話を学ぶことは、時代遅れといった印象を人に与えるだけでなく、政治的にも中国寄り、或いは台湾寄りの人間であると思われることさえあり、敬遠されていた²⁾。

1997年の中国返還は、香港での普通話の普及を決定的にした。返還式典では、1千万ドル(日本円1億5千万円相当)の花火を不注意で燃やしてしまったということ以外にも、香港人にとって2つの恥ずべきことがあったという。1つ目は、香港の規律部隊の足並みがバラバラだったのに対し、人民解放軍の一条乱れない行進が非常に対比的だったことである。2つ目は香港人の普通話が下手だということである。香港の官僚が、普通話で中央政府に宣誓の言葉を述べているのを見て、テレビの前で笑いをこらえ切れない香港人が多かったそうである。

言語学習は、政治と文化アイデンティティと大きく関係しているといえる。返還前の香港はイギリスの植民地であり、国際都市であった。よって、英語教育が非常に重視されていた。英語は行政用語となってお

り、政府の会議や法廷でもおしなべて英語が使用されていた。同時に、英語は最も重要な教育用語でもあった。小学校と中学校は、英文学校と中文学校に分かれていたが、英文学校では全ての科目が英語によって教授されていた。中文学校では広東語による授業が行われていたが、教科書は全て英語によって書かれたものが使用されていた。一部の左派学校を除いて、学校では普通話教育は行われていなかったのである。大学でも英語による教学がほとんどで、普通話は選択科目の一部にあるだけだった。

しかしながら、1997年以降、普通話は香港でよく耳にされる、馴染み深い言語となった。返還後の香港は「一国二制度」を取っており、言語でも教育政策でも中国大陸とは異なる政策を実施してきた。返還後の香港の教育政策は、これまでの英語重視から、英語と中国語をともに重視する政策へと転換し、政府は積極的に「二文三言語運動」を推進した。「二文」つまり、二つの文とは、中国語と英語の読み書きを指し、「三語」つまり、三つの言語とは、広東語、普通話、英語による会話を指す。董建華行政長官は、「二文三言語運動の推進は、我々の既定の政策です。香港は国際都市として、基本的な英語を普及させる必要があります。また、中国は中国の一部であるため、市民は普通話を修得しなければなりません。そこではじめて、中国大陸とコミュニケーションをとり、ビジネスを展開させることができるようになるのです。」と述べている³⁾。これだけを見ると、表面上は英語と普通話が同様に重要視されているような印象を受けるが、実際には、香港が国際金融都市として、また、中継ぎ貿易港としての地位を確立するためには、なおも英語教育の重要性が強調されている。普通話の推進は教育の重点とはなっていないのである。香港政府は、これまで大規模な普通話推進運動などを行うことはなく、「普通話の日」などを決めたり、普通話朗読大会や弁論大会、クイズ大会などを開催しているくらいであった。また、正確ではない発音の普通話を使って、タレントのケリー・チャン(陳慧琳)がテレビのコマーシャルで、普通話で買い物をするという店を紹介し、普通話を推進したこともあったが、実際にその店は、誰に対しても割引を行っており、宣伝効果はなかった。香港では、これまで日常生活で普通話を話す必要は全くなかったのである。

1997年以降、香港の学校は次々と普通話コースを併設した。しかしながら、中国大陸と異なることは、普通話が教学用語となっていないことである。香港で

は広東語を母語とする「母語教育」が推進されるようになってきており、教育言語も、従来の英語と中国語をともに重視する政策から、広東語のみを使用する政策に転換されつつある。その一方で、普通話¹は学校の中では、あまり重要視されない一科目となっているだけである。香港政府は、日本と同様に、小学校6年及び初級中学校3年の、9年の義務教育を行っているが、その9年間で、児童と生徒は普通話を学ばなければならない。しかし、それは週に1時間だけである。それと比較して、英語の授業時間は週に6時間である。そのような状況から、香港人の子供たちは、「你好嗎？(お元気ですか?)」「歡迎你来香港(香港へようこそ!)」「廁所在那里？(トイレはどこですか?)」「你有没有搞錯？(間違っていないですか?)」などの簡単な普通話の語句しか話せず、普通話で日常会話をこなすことはできない²。また、教師側にも問題がある。香港の小中学校の普通話の教師は、5千人余りいるが、その中で普通話が母語である人はたった1割だ。残りの9割は地元の教師だが、その中でも一部の人は、政府による研修を受けながら教えているのために、その水準には問題がある。大学生の状況はそれよりまだよい方である。大学生の中で普通話を履修している人が多いため、普通話を教学用語とする科目も増加した。香港中文大学では、1年生は必ず普通話の入門コースを履修しなければならない。また、各大学でも、毎年3~4ヶ月間の長い夏休みを利用して、中国大陸へ学習交流団を派遣している。

近年、普通話を取り巻く状況は、更に変化してきている。1993年以降、香港ラジオの普通話局は、毎年「普通話節」を開催し、香港人が普通話を学習するきっかけを作ってきた。そして、2001年及び2002年に、それぞれ「普通話日」と「普通話月」を開催したのに続いて、2003年には、香港の語文教育及び研究常務委員会、社団や学校などが組織する香港推广普通話大連盟と共催で、9月14日から11月16日にかけて、「普通話節2003」が開催されることになった。ここでは、全国的なレベルでの活動として、「全港普通話スキット・コンテスト」、「全港普通話歌唱大会」、「普通話公開講座」などが実施され、中でも、公開講座では、普通話の学習方法や普通話水平考試(普通話の検定試験)対策などが中心に教授される。学校活動としては、「普通話推進学校コンテスト」、「中学生普通話DJ訓練班」、「普通話演劇創作コンテスト」、「普通話演劇マラソン」なども計画されている³。また、香港中文大学によっても、これに合わせて「学生普通

話大使培訓計画」が実施されることになった。この計画では、1200人の学生が、有名人との普通話による面談、普通話によるラジオ劇創作及びコンテストといった内容を盛り込んだ2日間のキャンプに参加するというものである。その目的は、今後、参加した学生たちによって、キャンパス内で普通話を広めることにあるという。香港中文大学では、次期学長の劉遵義教授が「香港の若者は普通話、英語、広東語を学ばなければならない。広東語だけでは前途が限られる。」として、普通話と英語による教学を長期目標に掲げている⁴。

政府高官や公務員も、普通話の修得に力を入れている。香港で最大の雇用主であるといえる政府は、公務員全員に対して、普通話を学ぶことを積極的に奨励している。公務員は、勤務時間中に、無料で普通話の授業を受けることができる。政府高官となれば、さらに普通話を学ぶことが強制的になっている。なぜなら、彼らは常に、中国の中央政府や地方政府の役人と交流する機会があるからである。また、局長や大臣クラスの場合、北京で業務報告を行うことが頻繁であるから、普通話ができなければ仕事が成り立たない。普段、時間的にも、普通話の授業を受けることができない高官は、政府の費用で家庭教師を雇うこともできるのである⁵。これによって、今後は、返還式典の時のように、政府高官の下手な普通話で、悪印象を内外に与えることは、今後はあり得ないであろう。

一般人の間でも、普通話学習はブームになりつつある。普通話は、英語について多くの人が学ぶ言語となっている。日本語は3番目だ。多くの人は大学の課外コースや、公民館などで、普通話を学んでいる。特に、ビジネスやサービス業に従事している人は、非常に積極的だ。多くの香港人ビジネスマンは、次々と中国大陸に投資をしたり、輸出入を行ったりするようになっている。一部のビジネスマンは、毎日、車を運転して、中国と香港を行き来しており、中には中国に不動産を持っている人もいる。また、中国大陸からの観光客の増加も普通話の普及に大きく貢献している。現在、中国大陸からの観光客は、日本人観光客を抜いて、香港のホテル、旅行会社、宝石店や小売店といったサービス業界での、得意客となっている。2003年に、中国からの観光客は、団体旅行ではなく、個人旅行という形で、香港へ旅行することが可能になった。これにより、更にその増加が見込まれている。サービス業会の従業員や店員たちは、普通話をマスターして、中国人観光客から、人民元を落とそうと努力をし

ている。サービス業界では、従業員に対して、普通話の訓練を積極的に行っており、新規雇用者は、英語と普通話の能力が要求されるようになってきている⁸⁾。HSBC 銀行では、台湾や中国大陸の顧客に対応するために、1994 年に普通話訓練組を組織し、これまで、6 千人以上のローカル・スタッフと 2 百人余りの外国人スタッフが、普通話のトレーニングを受けてきた。現在も、毎年、約 7 百人のスタッフが、勤務時間内外で、普通話の初級及び上級講座を受講している。実際に、中国大陸からの若い女性観光客は「1999 年に香港に旅行に来た時は、通行人に地下鉄の場所を聞くだけでも、普通語を話せる人がなかなか見つからず苦労した記憶があるが、今回の旅行では、特にサービス業の人たちを中心として、香港人の普通語のレベルが高くなっていることに驚かされた。」と話している。また、最近、中国及び香港政府が合同で、中国と香港との経済や貿易を発展させるために、「内地與香港建立更緊密經貿關係的安排（CAPA、中国大陸と香港との更に緊密なる経済及び貿易関係を築くための計画）」に調印した。これにより、普通話の必要性は更に高まるであろう⁹⁾。

メディアや流行文化も、香港人が普通話を学ぶことに大きく貢献している。テレビを見ながら普通話を学ぶことは、最も簡単な学習方法だといえる。毎日、テレビのゴールデン・アワーに、「笑談普通話」という普通話の講座が 1 分間放映されている。中国や台湾で製作された番組からも、普通話を耳にすることができる。昨年、日本の漫画である「花より男子」をもとに製作された、台湾のテレビドラマも人気を集めた。最近では、中国大陸の歴史ドラマの popularity が上昇している。ケーブル・テレビでは、更に多くの普通話チャンネルを視聴することができる。ラジオでも、普通話の局番が出現した。台湾の流行歌も、香港では非常に人気があり、歌を聴いたり歌ったりするのと同時に普通話が学べる。香港のタレントも、海外の華人マーケットを開拓するために、多くが苦労して普通話を学んでおり、香港の歌手も次々と普通話によるアルバムを出している。タレントたちが中国大陸で、テレビ・ドラマの収録を行ったり、広告の撮影を行う機会も増加した。香港の映画やテレビ俳優も、普通話を使って、海外で活躍している。賽馬会毅智書院普通話科では、歌手のジャッキー・チュン（張學友）、アンディ・ラウ（劉德華）、ジョエイ・ヨン（容祖兒）やレオン・ライ（黎明）による普通話の歌謡曲を教材として使用することによって、生徒の興味を引きつけている¹⁰⁾。しか

しながら、チョウ・ユンファ（周潤發）の「グリーン・デスティニー（臥虎藏龍）」を例にあげると、ぎこちない香港なまりの普通話は、彼の演技の評価を落としている。歌手も同様で、アンディ・ラウ（劉德華）が歌う普通話の発音は、かなりいい加減であるし、2003 年に自殺したレスリー・チャン（張國榮）も訛りがひどいと言われている。歌手の中では、レオン・ライと（黎明）フェイ・ウォン（王菲）だけが正確な普通話（標準語）を話すが、それは、彼らが北京からの移民であるからだ。こういった普通話の普及によって、2003 年度の普通話水平考試では、千人以上が受験した。1998 年度の 275 人と比較するとこれは飛躍的な数字である¹¹⁾。

4. 中国語とシンガポール人

シンガポールでは、会話能力の面においては、シンガポール人の方が香港人より上である。中国系シンガポール人の多くは、かなり流暢に華語（シンガポールでは普通話のことを華語と呼んでいる）を話することができる。1993 のシンガポールプレス・ホールディング社、1997 年のフォーブズの調査によると、8 割以上の華人が華語で会話する能力を有しているという。また、第 8 チャンネル（華語系）の視聴率は、第 5 チャンネル（英語系）を上回っている。華語を媒介としたマス・メディアは、華人の中では支持されており、それが華人の華語を聞く能力を維持させていると言われている¹²⁾。

しかし、シンガポール人が話す華語は、シンガポール風の中国語で、中国や台湾のものとはかなり異なる。シンガポール人の華語は、福建語やマレー語、そして英語の影響を受けている。方言が語源のものを例に挙げると、「顯（xian）」は福建方言で、つまらない、鬱陶しいという意味の形容詞であり、正確な中国語は「悶（men）」或いは「膩煩（nifan）」である。また、「大耳窿（da er long）」は広東方言で、違法の高利貸を意味する名詞であり、「非法放高利貸的人」と言い換えないと、中国（広東省以外）や台湾大陸では通用しない。マレー語が語源で、よく華語として使用されている語句には、「巴刹（basha、市場の意、語源はマレー語の pasar）」や、「峇峇（baba、中国系とマレー系の混血の男性子孫の意、語源はマレー語の baba）」などがある。英語が語源の語句では、「NETS 亭（NETS ting、銀行のキャッシング・マシンの意、英語の NETS Kiosk から訳された語）」や、「三文

治 (san wen zhi, サンドイッチの意, 英語の sandwich の音訳)」などが普遍的だ¹³。シンガポール人は、このような華語をかまわず使っているどころか、それを誇りにさえ思っているのである。これには民族に対する尊厳やユーモアによるものであると考えられる。シンガポールで製作された映画やテレビドラマでさえも、こういった華語を使用している。1998年上半期に上映された国産映画 *No Money Enough* は、華語学校卒業生である中年サラリーマンを主人公とした映画であるが、英語ができる若い社員の存在に屈辱を感じ会社を辞めた主人公が、英語が不得意なために再就職先を見つけられず、旧友2人と苦勞しながら自力で洗車会社を築いていくというストーリーである。ストーリーのおもしろさ以外にも、会話の中に福建語やシンガポール式華語が登場することから、多くのシンガポール人から好評を得て、国産映画史上初の入場者数を記録することとなった。こういった現象は、シンガポールの国民意識の高まりを示す1つの例であるといえよう。当然、英語を話しても、華語を話しても、その中にシンガポールの特色が取り込まれている。例えば、高齢の中国語教育を受けたシンガポール人が英語を話す際に、華語で「過去」や「完了」を表す「了 (le)」を、英語の現在文の語尾に付けて、過去形にしてしまう例がよく見られる。このような、シンガポール式の英語や華語は、シンガポール人の生活の中では不可欠であり、シンガポール文化の一つとなっている。また、シンガポール華人の伝統行事である中元節などでも、標準の中国語を使用すると、その場の雰囲気をおちこわすということで、現在もなお、シンガポール式の華語や方言が使用されているのである¹⁴。上述のように、シンガポール人は、中国語のことを「華語」と呼んでいる。「華語」は華人の言語という意味であり、大陸の「普通話」や台湾の「国語」という呼称は使わない。同様に、中国系の人々は自らのことを「華人」と呼び、「中国人」と区別して使用している。こういった「華語」や「華人」といった名称も、中国系シンガポール人のアイデンティティを表す語であるといえる。

現在、シンガポール華人の母語は英語で、華語は第2言語だといってもよい。英語は公的な言語でもあり、教育用語でもある。国会や学校では英語が使用されている。シンガポールでは、大臣の大半が華語が全く話せない。リー・クアンユー上級相と、ゴー・チョクトン首相の華語は小学生並であると言われている。彼らは大人になってから、華語を学んだため、あまり

流暢に話せないのである。彼らは英語で思考し、それを頭の中で華語に訳してから話しているのだ。彼らが、中国の指導者と会見するときは、いつも、通訳を使って英語で話す。それは、彼らの中国語能力に限界があり、間違いや恥ずかしい思いをすることを避けるためだけではなく、中国の指導者に対して、シンガポールは政治的にも文化的にも中国の一部ではないということをアピールするためでもある。

シンガポール華人の中国語の会話力は、香港人よりも上だと述べたが、読み書きの能力は香港人の方が上だといえる。これまで、シンガポールを旅行した中国人、香港人、台湾人の多くがシンガポール人の中国語力は低いと感じており、そこから数々の笑話が生まれている。例えば、シンガポールの空港で、到着したばかりの観光客に無料で提供されるシンガポールのハンドブックがあるが、数年前まで、その中国語版には多くの錯誤が多く見られた。それは、ただ単に英語を直訳しただけの、中国語らしくない中国語であり、その内容を見てみると、翻訳者の中国語レベルの低さや、中国文化への理解のなさが一目瞭然である。例えば、英語の「Chinese New Year」は、「旧暦のお正月」または「旧正月」と訳すべきところを、「中国人のお正月」と訳されている。次に、英語の「Hungry Ghost」であるが、これは日本の「お盆」にあたり、先祖の霊が地上に戻ってくることを祭る華人の伝統行事である。この行事は、英語では「ハングリー・ゴースト」つまり「お腹をすかせた霊」と言われているだが、中国語では、本来なら「中元節」や「盂蘭盆」と訳すべきところを、東ヨーロッパの国であるハンガリーと勘違いされて、「ハンガリーの鬼祭り」のように訳されている。また、リー・クアンユー上級相の肩書きも、以前の首相のままだったりと、間違いは数多く、中国語がわかる観光客をびっくりさせている。観光客は、観光地などでみられる奇妙な中国語による説明にも驚かされている。シンガポールでの生活経験がある香港人によると、地下鉄の駅構内で「請勿自跨 (自分で足を踏み入れないでください)」という中国語の看板を見て、最初は、「跨」を「誇」と間違えているのかとも思ったそうである。「誇」の場合は、「請勿自誇 (傲慢にならないでください)」という意味になるのだが、共産国家ではないのに、公共の場所でこのような道徳的なスローガンを掲げるのも不思議なものだと最初に感じたそうである。後でわかったところ、「請勿自跨」は、「足元に気をつけて下さい」ということを表しているということであった。香港では、「請

小心月台與車廂之內的空隙（ホームと車両の間の隙間に気をつけて下さい）」という正しい文法の中国語が使用されているのだが、シンガポールではこのように奇妙な中国語が使用されていることに驚く観光客は少なくない。

シンガポールの華語のレベルの低下は顕著で、その勢いは凄まじいといえる。以前、中国大陸の小学校校長の交流団が香港に来て、香港の小学校を見学した際に、香港の小学校6年生の中国語が、中国大陸の小学2年生程度だと感じたそうである。もし、この交流団が、シンガポールの小学校を見学したとすれば、おそらく、シンガポールの6年生の華語は、中国の幼稚園程度に感じるであろうと考えられる。1998年、ジョージ・ヨー情報相（当時）は、「1989年における家庭での華語の使用率69%に比べ、今年は56%に落ち込んだ。小学生は今のところは家庭で華語を使用するものが半数を超えているがそのうち英語と逆転するかもしれない。南洋大学卒業生を中心としたかつての華語を話すエリートに続く、華語が話せる優秀な人材を育成しないと、母語を持たない根無し草が増え、社会に悪影響が出ることになる。」と華語人口の減少に危惧を抱いているほどだ¹⁵。

シンガポールの華語のレベル低下は、シンガポール政府の言語政策と教育政策と関係している。シンガポールは多民族国家で、華人以外に、マレー人やインド人などが居住している。シンガポール独立後、マレー語を国語として制定されたものの、民族の平等と団結のために、英語がシンガポールの共通言語として使用されるようになった。政府は、幼稚園から大学までの全ての教育機関で英語による教学を義務づけている。英語は全ての学生にとって第1言語であり、第2言語は自分の民族の言語となっている。華人なら華語、マレー人ならマレー語、インド人ならタミール語である。シンガポール華人は国民の約75%を占めているが、華人であっても、華語ではなく、英語が第1言語なのである。若い世代の華人にとっては、華語は事実上の外国語と言えるのである¹⁶。最近の調査によると、現在のシンガポールのうち、5人に1人は華語を話すことができない。日本でもよく知られている歌手のディック・リー（Dick Lee）もその中の1人である。アジアでは歴史上、華語が話せるということは一種のステイタスとなっていた。しかし、現在のシンガポールでは、華語が話せないことがステイタスになっているともいえるのだ。英語しか話せない政治家、医者、弁護士や教授などといった一部のグループの人々

が、社会的に認められているのである。華語を主に話す人はその次、方言を主に話す人は更にその下に見られることが多い。南洋理工大学の郭振羽教授は、華語にとってかわられつつあるコーヒー・ショップ、フード・コート等で使用されている方言が、次元の低い言語として理解されている事実を『聯合早報』にて指摘している¹⁷。

英中バイリンガルのシンガポール人は、状況によって、英語と華語を使い分けている。高級レストランでは英語、街の屋台などでは華語や方言を使い分けている。筆者が1997年に実施した調査によると、被調査者のうち、中学生の64.7%、大学生・大学院生の80.8%、社会人の54.5%がデパートで英語を使用している。聞き取りでは、「デパートでの華語や方言の使用は場所にそぐわない」、または「高級ブランドの店の中で方言を使うと変な目で見られた」等、デパートでは英語の使用が当然といった意見を述べる被調査者が多かった。参与観察では、チャイナ・タウンにあるような中華系デパートを除いて、一般デパートの店員は、まず若い華人客に対しては必ず英語で話しかけ、顧客が華語を話すとそれに合わせて臨機応変に華語に切り替えている。顧客が中高年華人である場合は、店員は最初から華語を使用して対応している場合が多いということが確認できた。一方、デパートとは対照的に、フード・コートでの主要な使用言語は華語である。屋台などのフード・コートの華人従業員は、華語学校出身者や高齢者を中心とする未就学者である場合が多いため、一般的には従業員と顧客との会話は華語を介して行われる場合が多く、場合によっては方言も使用される。筆者の調査では、小学生の65.9%、中学生の64.8%、大学生・大学院生の53.1%、社会人の53.3%がフード・コートでは華語を使用していた。聞き取りでも「相手（店員）が英語を話せるかどうか分からないのでとりあえず華語を使用する」、「英語を話すと無視されたことがある」や、「方言を使うと親しみを持って対応してくれる場合が多い」という英語回避派の意見が多かった。こういった状況を考慮して、フード・コートでは最初から英語を強行せず、無難な華語を使用する場合が多い。参与観察においても、例えば、大学内のフード・コートの場合であっても、普段英語を使用している大学生が、華語に切り替えて注文をする場面が多く見られた。一般的には、あまり英語ができない人でも、見下されるのが嫌で、高級な場所や、初対面の人相手には、無理をして英語を話す傾向が強い¹⁸。シンガポール華人の語学の応用には一つ

の特徴があり、ある特定の場面では、バイリンガルであっても、一般的にはどちらかの言語を多く使用するということである。シンガポールでは英語は各民族の共通語であり、その地位は不動のものである上に、他民族との会話は必ず英語になる。華人は家庭内或いは友人と会話をする際、はじめて英語を使うか華語を使うかという選択に迫られるわけである。その際に、英語を選択する傾向が強くなるのである¹⁹。

シンガポール政府は、1979年以降、「スピーク・マンダリン・キャンペーン」を展開している²⁰。「スピーク・マンダリン・キャンペーン」というのは、「華語を話そう」という運動である。当初の10年は、日常生活における華語の使用を目的としていたが、後の10年は中華文化に照準を当て、華人の伝統風俗の紹介、華語吹き替えによる中国・香港・台湾映画の上映、華語戯曲等の文化的な行事を増やすことに力が入れられた。また、中国の改革開放に伴い、華語はビジネスにおける重要な言語として受け入れられ、インターネットでも華語は普遍的に使用されるようになってきている²¹。この運動は、シンガポールの国民全体の運動ではなく、華人を対象にしたものである。主な目的は、華人社会の団結と、華人の民族アイデンティティの創造にある。一世代前のシンガポール華人は、自分の故郷の方言をより多く話していた。華人の中でも福建人が多かったのも、方言の中でも福建語が最も多く使用されていた。その他には、潮州語、海南語、客家語や広東語を話す人も多かった。シンガポール政府は、地域主義や方言グループ同士の闘争をなくし、シンガポール人の凝集力を高めるために、この運動を通して、華人に対して、方言を話さず華語を話すように奨励したのだが、それにともなって、映画館、テレビ、ラジオなどでの方言の使用や、方言による映画、テレビ番組や歌謡曲の放映は禁止されることとなった。全ての香港映画は、華語による吹き替えが行われた。実際に、近年、日本でも人気を集めた映画の「少林サッカー」が、華語に吹き替えられて上映されていたが、味気ないものであった。香港の歌手がシンガポールでコンサートを開くときも同様で、得意な広東語の歌を歌えず、舞台の上での、ファンとの会話も全て華語で行わなければならなくなっている。

華語が普遍的になったことによって生じた問題として、以下の2点が指摘されている：まずは、方言を話せなくなった若者達が、自分の祖先は中国のどの省から来たのか、自分のルーツはどこなのかわからなくなり、根無し草になる可能性がある。これは国民教育を

推し進める上で、一見プラスに見えるが、実はマイナスになることに留意しなければならないといわれている。2点目は、方言しか話さない祖父母と孫達の意志の疎通に欠け、政府が推し進めようとしている大家族主義や伝統的価値観が育たないという点だ²²。「スピーク・マンダリン・キャンペーン」の2つ目の目的は、中国大陆の急速な経済成長の波に乗って、中国への投資やビジネスを行いやすくするためである。ゴー・チョクトン首相は「シンガポール華人の長所は、他地域の華人と意志の疎通ができることである。また、彼らは、華語と英語に精通し、西洋と東洋の文化にも総じて慣れ親しんでいるため、東西の経済体系にも問題なく参入することができるだけでなく、それらの架け橋にもなる。これは、シンガポールが、グローバル都市としての地位と、東西を共有する中立的な都市としてのシンガポールを確立することができる」として、華語が話せることによる経済効果について述べている²³。しかし、政府の方言に圧力をかける政策は、かえって中国への投資やビジネスに悪い影響を与え、逆効果となっていると考える人もいる。中国各地で、その土地の方言を話した方が、意気投合しやすく、ビジネスチャンスも広がるというからである。

「スピーク・マンダリン・キャンペーン」が成功しているかどうかを議論するのは、今の段階では難しいところだ。長年の運動で、華人の若い世代の多くが方言を話せなくなったが、皮肉なことに、華語も同様にあまりできなくなっている。「スピーク・マンダリン・キャンペーン」では実際に、華語を話す方面に力を入れているが、読み書きとなると英語の方が優位になる傾向がある。読み書きができてこそ、華人文化を理解し継承していくことができるのに、それが弱いのである²⁴。華人は更に英語化していく傾向にある。日常生活では英語が主流である。もちろん、読み書き、聞き取り、会話でも英語が一番身近な言語なのである。華語は、特に若い華人にとっては第2言語でしかない。学校でも華語を学ぶ時間は少なく、学生の華語のレベルも下がる一方である。この状況を重くみた政府は、華語教育を強化するどころか、逆に、華語コースのレベルを低くし、教師が英語を使って華語を教えてもよいことにした。これによって、新しい世代の華人の華語能力は更に下降していくことだろう。

ここで、日本とも関係のある、1つの興味深い現象を紹介したい。現在の新しい世代のシンガポール華人は、基本的には、華語の文章を読むのが好きではない。しかし、多くの人が日本の漫画を読むために、華

語の文章を読んでいるのである。日本の漫画は、シンガポールの子供や青少年の中で、非常に人気がある。そのほとんどは、香港、台湾、または地元で訳された中国語版で、英語版は皆無といっている。読者は、選択肢がないので、仕方なく中国語を読んでいるのである。日本の漫画が、知らずの間に、シンガポールで中国語の普及に力を貸しているというのは、とても意外な事実であるといえよう。

5. おわりに

シンガポールと香港は、元々、類似点が多く見られた。両者はともに、以前はイギリスの植民地だったこと、また、国際自由貿易港でもあり、華人が主流を占める社会だということであった。しかし、歴史の発展の違いから、シンガポールは独立した国家となり、香港は中国に返還され、中国の特別行政区となった。両者は、現在は、中国の政治や文化アイデンティティでも、はっきりとした違いを見せている。

シンガポールは「非中国化」つまり、中国ではない国家となり、香港は「中国化」の道を歩んでいる。この2つのパターンは、両地の中国語教育を反映している。シンガポールでは、表面上はマレー語が国語と決められているが、事実上は英語が国語となっている。華語は華人の第2言語でしかないのである。また、華語を学ぶことは、国家の利益のためであり、華語を使うことによって、文化的にも心理的にも中国と近くなっているわけではない。シンガポール華人の多くが、自分たちは中国大陆よりも優位に立っていると感じており、多方面にわたって中国とは境界線を引いている上に、自分たちは華僑でも中国人でもない、シンガポール人だと自負している。政府は中国からの影響に対して警戒心を持っており、シンガポールの国家意識と民族の団結を破壊されないためにも、市民には必要以上に中国文化を宣揚させないようにしている。よって、中国語で教学を行っていた南洋大学やその他の中国語学校は、すべてが閉校に追いやられたり、英語学校として統一されることになったのである。

香港は、シンガポールとは全く異なる方向へ進んでいる。返還前の香港人には、自分たちはイギリス人ではないが、中国人であるかどうかははっきりしない、というアイデンティティ・クライシスが存在していた。言語面でもそのような混乱が見られた。中国語は一般の人々の第1言語であり、人々は正しい中国語を書き、広東語を話していたが、英語が公的な言葉であ

り、また教育用語でもあった。返還後、中国人としての民族意識が高まり、中国語の地位もそれと同時に急上昇して、英語とともに公的な言語となった。そして、普通話も学校での必修科目となり、また社会的にもブームとなったのである。現在、普通話は、香港と中国の間の文化及び心理的距離を縮めることとなり、多くの香港人が、自分は中国人であるというアイデンティティを持つようになった。そして、カラオケでも常に、「私は中国人（我是中国人）」や「龍の傳人（龍的傳人）」などを歌い、自分たちの感情を表現するようになっているのである。

注

- 1) 『星島日報』（香港：2003年9月13日）
- 2) 1997年以前の香港における普通話の状況は、田小琳「香港中学教学普通話の重要性、必要性、迫切性」、田小琳編『香港中文教学和普通話教学論集』（北京：人民教育出版社、1997年）、70-74頁に詳しい。
- 3) 何國祥『香港世紀之交の普通話教育』（香港：香港教育学院中文系、2001年）、19-20、30-37頁。
- 4) 黃月圓、楊素英、李蒸『論香港小学普通話教学』（香港：語文教育及研究常務委員會、2000年）
- 5) 『星島日報』（香港：2003年9月22日）
- 6) 『星島日報』（香港：2003年9月13日、10月9日）
- 7) 香港政府高級政務官 K 氏へのインタビューによる。（香港にて：2003年9月12日）
- 8) 『星島日報』（香港：2003年9月13日）
- 9) 『星島日報』（香港：2003年9月22日）
- 10) 『星島日報』（香港：2003年9月13日）
- 11) 『星島日報』（香港：2003年9月13日）
- 12) 『聯合早報』（シンガポール：1998年9月12日）
- 13) シンガポール特有の華語については、汪惠迪編著『時代新加坡特有詞語詞典』（シンガポール：聯邦出版社、1999年）を参照。
- 14) 『聯合早報』（シンガポール：1998年10月3日）
- 15) 『聯合早報』（シンガポール：1998年9月13日）1980年代の華人青少年の華語能力については推広華語秘書処編『十年華語』（シンガポール：推広華語秘書処、1990年）52-55頁に詳しい。
- 16) シンガポールの教育制度については Ang Beng Choo, "Teaching of Chinese Language in Singapore", Anne Pakir, et. al, eds., *Language, Society and Education in Singapore: Issue and Trends* (Singapore: Times Academic Press, 1987), pp. 313-329. に詳しい。
- 17) 『聯合早報』（シンガポール：1998年10月4日）
- 18) 合田美穂「シンガポールにおける2言語教育の社会的貢献とエスニック・アイデンティティー華人青少年の意識調査からの考察」、立命館大学国際言語文化研究所編『言語文化研究』、11巻3号、1999年12月。
- 19) 『聯合早報』（シンガポール：1998年10月4日）
- 20) 政府の「スピーク・マンダリン・キャンペーン」に

おけるその意図と長所は、推广華語秘書処編『十年華語』（シンガポール：推广華語秘書処，1990年）20-21頁。李光耀著『李光耀談新加坡的華人社会』（シンガポール：新加坡中華総商会，1991年）28-63頁に詳しい。

- 21) 『聯合早報』（シンガポール：1998年9月12日）
- 22) 『聯合早報』（シンガポール：1998年9月19日）
- 23) 『聯合早報』（シンガポール：1998年10月31日）
- 24) 『聯合早報』（シンガポール：1998年9月19日）